

# 「散策と回想」<sup>(1)</sup>

—— ネルヴァルのもうひとつの最後の作品 ——

小林 宣之

## はじめに

ネルヴァルのもうひとつの最後の作品というのは勿論「オーレリア」を念頭に置いた言い方である。「オーレリア」は1855年1月1日号と2月15日号の「パリ評論」誌上に発表されるが、ネルヴァルはこの間1月26日未明にヴィエイユ＝ランテルヌ街というパリ市内のさみしい路上で縊死体となって発見される。「オーレリア」の内容の特異さと作者のショッキングな死にぎまとの劇的な対比が、この作品をネルヴァルの文学上の遺言として決定的に印象づけることになる。例えばアルペール・ペガンのネルヴァル論<sup>(2)</sup>に代表されるように、ネルヴァルは「オーレリア」を書くことによって作家としても人間としても救済されたとする作品観はこの事態を典型的に示していると言うことができよう。

「散策と回想」は従来あまり正面から論じられることの少なかった作品と言ってよい。その数少ない論者の中にロス・チェインバーズとレオン・セリエを始めとする若干の研究者を数えることができるが、概ね「オーレリア」への過渡的な作品という立場からの接近であると言ってよい。唯一の例外として、ジャック・ボニがガルニエ・フラマリオン新版のネルヴァル作品集『オーレリアその他の自伝的なテキスト』の序文で行なっている言及を挙げることができる<sup>(4)</sup>。すなわち、この作品の発表経緯を見れば、「散策と回想」が「オーレリア」への道程に位置する作品だと言うにはクロノロジーの点で無理があるというごく単純な指摘である。「散策と回想」は「オーレリア」とほぼ同時期の1854年12月30日、1855年1月6日、同年2月3日に都合3回にわたって当時の絵入り週刊誌「イリュストラシオン」誌上に発表されたのであるが、執筆の経緯そのものの詳細は不明であるものの、その時期については1854年の7月下旬以降年末にかけてごく短期間に書かれたというのが定説になっている<sup>(5)</sup>。したがってよく言われるように「オーレリア」のみがネルヴァルの最後の姿を示す究極の作品なのではなく、「散策と回想」もまた作家の最後の姿を映す鏡の1枚なのだと考えなくてはならない<sup>(6)</sup>。

「散策と回想」と「オーレリア」という2つの作品を比べてみれば、後者をネルヴァルの文学的遺言と考えるのは自然の勢いというものであろう。それほど「オーレリア」はネルヴァルの作品全体の中でもユニークな立場を占めているし、フランス文学史上類例のない特異な作品だと言える。一方「散策と回想」は同じ作家の他の作品、とりわけ「アンジェリック」と「十月の夜」との類似が云々される目立たない地味な作品である。作品構造上のダイナミズムの点では到底「オーレリア」の比ではない。

そこで本稿では、ボニの指摘に勇気づけられながら、このようなある意味では過去の作品の焼き直しとも言える作品が「オーレリア」を書きつつある作家によって、しかも死の前夜とも言うべき精神的にも肉体的にも追い詰められていたに違いないこの時期になぜ書かれねばならなかったのか、を多少とも明らかにしてみたい。

### 「散策と回想」の構成と主題および完結性の問題

「散策と回想」は全8章から成り、前述したように最初の3章が「イリュストラシオン」誌1854年12月30日号に、次の3章が1855年1月6日号に、最後の2章が2月3日号に掲載された<sup>(7)</sup>。したがって第7章と第8章は「オーレリア」第2部と同様死後発表ということになり、完結性の問題が生じるのである<sup>(8)</sup>。レオン・セリエはガルニエ・フラマリオン旧版のネルヴァル作品集の序で、「散策と回想」は最初の3章が〈散策〉を、次の3章が〈回想〉を、最後の2章が再び〈散策〉をモチーフとする3部構成 (triptique) を採っていると指摘しているが、この3部構成が〈3・3・2〉という若干不整合な構成になっている点はこの作品に対して未完結性の印象を抱かせることになろう。しかし、セリエが実際に主張しているのはこの作品の完結性であって、その根拠として、表現することの喜びが終始一貫して見られる点、先行する〈回想〉のパートに影響された後半の〈散策〉のパートが2章しかないのは作者の死という時間切れの問題ではなく、〈住居探し〉の不首尾という内面的なモチーフの問題と考えられる点の2点を挙げている<sup>(9)</sup>。

この節ではまず、「散策と回想」の構成を明らかにすることによって主題を浮き彫りにし、最後に完結性に対する疑義について私見を述べてみたい。

#### 構成

「散策と回想」の構成について考える場合に、既に紹介したレオン・セリエによる3部構成を出発点にすることに異論はないだろう。最初の3章を〈散策〉のパートとして括る根拠は、語り手が冒頭で〈住居探し〉のモチーフを導入し、そのためにモンマルトルの丘 (第1章) とパリ郊外のサン＝ジェルマン (第2・3章) を〈散策〉することにある。後で触れるようにモンマルトル、とりわけサン＝ジェルマンは語り手にとって〈思

い出)の場所であり、この〈散策〉は自ずから〈回想〉を紡ぎ出す仕掛けになっている<sup>(10)</sup>。語り手はここで全面的に〈回想〉に身を委ね、幼少年期の〈思い出〉を語る(第4・5・6章)。この〈回想〉はサン＝ジェルマンにおいてなされると考えざるを得ないが、語り手はその〈思い出〉に導かれて幼少年期を送った土地ヴァロワへ実際に赴く。この地理的移動を再び〈散策〉のパートと分類するわけである(第7・8章)。「散策と回想」の構成をこのように3部構成とすることは「イリュストラシオン」誌への分載の仕方にも合致しているわけで、ネルヴァルの意図にもある程度添ったものであると考えてよいのではないだろうか。

ただロス・チェーンバーズや大浜甫氏も言及しているように、〈回想〉のモチーフが実際には〈回想〉のパートの開始される第4章以前に既に現れていることは指摘しておくなくてはならない。上にも述べたように、〈住居探し〉の場所として選択されるモンマルトルとサン＝ジェルマンは語り手にとって〈思い出〉の場所と位置づけられており、〈住居探し〉のモチーフは既に第1章においてその影を薄くし始めているのである。このモチーフが形式的に継続される第2章冒頭において、パリ中を探しても条件に合う家が見つからないため郊外に範囲を広げることを思いついた語り手が、候補地に挙げたヴェルサイユとサン＝ジェルマンのうち後者を選ぶ理由に〈回想〉への方向性の強化を見て取ることができよう。この町には嘗て親戚があり、サン＝ジェルマンは20年前よく訪ねてきた「私にとっては思い出の町だ」(671ページ)というのである。この方向性は、第3章において、この町のとある小さなカフェで見掛けた古いロマンスを歌う老人の姿が、妻を亡くしたばかりの若かった父親が同じように歌っては涙を流していたのを思い出させると述懐されるに及んで、〈回想〉のパートを待たずして既に決定的なものになっているときええよう。同じ事は後半の〈散策〉のパートについても言える。サン＝ジェルマンでひとしきり〈回想〉に耽った語り手はサンリスを最終の目的地にしてヴァロワ地方に赴くが、その途次第7章の末尾に顔を出し、第8章で本格的に語られるセレニーの〈思い出〉は、それらの章における〈散策〉と〈回想〉の混在を象徴的に物語るものと言えよう。したがって上述の3部構成は飽くまでも概括的なものであり、2つの〈散策〉のパートは(第1のパートは漸増的に、第2のパートは漸減的に)〈回想〉の侵食を受けているのである。

## 主題

以上に述べた構成上の概略から、「散策と回想」の主題がその表題を構成する2つの要素のうち後者にあると考えて大過ないであろう。既に指摘したように、第1章にまず導入される〈住居探し〉のモチーフは物語の口実である<sup>(11)</sup>。語り手がパリ市内に見つけるべき住居の所在地としてモンマルトルをまず念頭に浮かべ、パリ市内を諦めてサン＝ジェ

ルマンに候補地を移す内的な必然性が、〈回想〉を促す触媒たりうる場所という点にあることは語りそのものが証明している事実であろう。実際語り手は第3章の中程と末尾に、この物語の主題が〈回想〉であることを明かす重要な言及を挿入している。

つまり、ある年齢——女性について言われるような、更年期に相当する年齢——があるのだ。この年齢に達すると思い出が実に鮮明に蘇り、忘れられていた幾つかの模様が人生の皺寄った網目の下から再び姿を現してくるのだ！（676ページ）

私は先程言った。——私の若い頃の年月が私のもとへ戻ってくる、と。——そして、好きだった場所を眺めていると過ぎ去ったものへの愛着が心のうちに呼び起こされる、と。サン＝ジェルマンとサンリスとダマルタンが、パリから程遠からぬ所であって私の最も大切な思い出につながる3つの町である。今は亡き昔の親戚たちの思い出が幾人かの娘たちへの思いと物悲しく結ばれている。彼女たちの愛のおかげで私は詩人になれたのだし、また、そのつれなきのせいで、私は皮肉になり物思いに沈むことになったのだ。私は優しさと友情を込めた手紙を書くことで文体を学んだのであるが、今も手元にあるそれらの手紙を読み返してみると、そこにははっきりと当時の読書の、とりわけデイドロとルソーとセナンクールを読んだ痕跡が認められる。これまで述べてきたことから次の部分を書いた時の気持ちの説明はつくだろう。私は、あの秋の美しい日々のおかげでサン＝ジェルマンがまた好きになり始めたのである。私は「守護天使」ホテルに身を落ち着け、散策の合間に幾つかの思い出を綴ったのだが、それに敢えて「回想録」という題を付けようとは思わない。それはむしろ、ジャン＝ジャックの孤独な散策の構想から着想したものと言えらるだろう。私はそれらを私が成長し彼が死んだ土地で仕上げることにしよう。（678ページ）

最初の引用箇所は、総裁政府時代（1795年～1799年）に青春を送ったひとりの老人が当時の身なりそのままに、その頃の人気歌手だったガラ（ピエール・ジャン・ガラ、1764年～1823年）の古いロマンスを歌うのを聞いて、父親のことを思い出したことが語られる直前に位置している。構成の箇所で触れたように、この粹な老人の話は物語の流れを〈回想〉へと決定的に方向づける重要なファクターなのだが、この挿話は思い出が蘇ってくる年齢に達したことの自覚の表明を裏付ける実例として用意されているのである。〈回想〉の年齢に達したことの自覚については既に「アンジェリック」第6の手紙に同様の表明が見られる<sup>(19)</sup>が、ここでは語りの方角をより円滑に転轍させる機能を担っていることが強調されねばならない。

「散策と回想」にとってより重要なのは2つ目のかなり長い引用箇所の方で、そこには物語を展開していく上で欠くことのできない仕掛けが幾つか見いだされる。第1に、「パリから程遠からぬ所にあつて、私の最も大切な思い出につながる3つの町」が、サン＝ジェルマンに加えてサンリスとダマルタンであるとされている点に注意したい。サンリスとダマルタンという地名の列挙は、ネルヴァルの言わば〈自伝衝動〉が幼少年期を過ごしたヴァロワにおいて最もよく触発されることを改めて確認させてくれる。また、ダマルタンがこの作品で以後言及されることはないが、サンリスに関しては既に語り手のヴァロワ行きの最終目的地がこの町であることを構成の箇所指摘しておいた。その特権性は、〈散策〉のパートの再開される第7章において、実際にヴァロワへ赴くことが語られる直前に「サン＝ジェルマンは私にサンリスのことを連想させた」（686ページ）という1文を挿入することでもう一度確認される。サン＝ジェルマンとサンリスが「散策と回想」における最も特権的な土地の名なのである。第2の留意点は、語り手の〈回想〉の主題が〈愛〉であることが示唆されることである。この主題が土地に深く結び付いた「今は亡き昔の親戚たちの思い出」と「幾人かの娘たちへの思い」の2つの要素から成る点に注意を喚起しておきたい。最後の仕掛けは、この物語がルソーの『孤独な散歩者の夢想』に着想を借りたものであり、更にこの物語を「私が成長し彼が死んだ土地で仕上げよう」という語り手の心積もりが明確に示されていることである。この最後の点は「散策と回想」の完結性の問題に示唆を与える重要な箇所である。

以下で問題にしたいのは上に指摘した第2点、すなわち〈愛〉の主題の概要である。第4章から始まる本格的な〈回想〉は、母方のそれに限られはするが、祖父の代に遡る家系的な順序を踏み、その死への言及に始まる逆説的な母の思い出（「私は一度も母を見たことがない」、680ページ）と運命の転換点と位置づけられる父の帰還（「この日から私の運命は変わった」、681ページ）で始まり、第5章に移ると両親不在の幼少年期の語り手を取り巻いていた女性たちへの思慕が主題として台頭し始めるが、この〈愛〉の主題は第6章を越えて最終章まで持続する。叔母、女中のジャネットとファンシェット、遊び仲間だったルイーズ、ヌーヴェル嬢、「クレオール（植民地生まれの女）」と呼ばれる刺繍女工、エロイーズ、更にセレニーといった女性たちへの長短さまざまの思い出が矢継ぎ早に語られるのである。第6章の末尾に置かれた次の一節はこれらの愛を喪失の相において一括する。

——ああ、私の失われた未熟な愛の痛みと悔恨よ、おまえたちの思い出は何と残酷なのだろう！「人間の魂の冷め果てた熱狂よ、おまえたちはなぜもう脈打たない心臓をまた温めようと戻ってくるのか。」エロイーズは今では結婚している。ファンシェットもシルヴィもアドリエンヌも私にとっては永久に失われてしまった。

——世界は虚ろだ。悲し気な声をあげる亡霊たちに満ちた世界は、私の虚無の残骸の上で愛の歌を吐いているのだ！それでもいいから戻ってきてくれ、懐かしい面影たちよ！私はあんなに愛した、あんなに苦しんだのだ！「空を飛ぶ鳥は茂みにその秘密を告げ、茂みは吹きゆく風にそれを告げた。——そして悲し気な水は至高の言葉を繰り返した。——愛！愛！と。」(685ページ)

「私の失われた未熟な愛の痛みと悔恨」という言葉に要約される〈愛〉の対象にシルヴィとアドリエヌという「散策と回想」には本来属さない固有名詞が混入していること、後半部には明らかに「オーレリア」にふさわしいと思われる非現実的な表現が見られることによってこの一節には一種奇妙なところがあり、〈愛〉の主題をより限定的に〈失われた愛〉として明確にする一方、この作品の存立基盤を崩壊させかねない危険性をも孕んでいると言える。既に構成を論じた箇所<sup>(14)</sup>で指摘しておいたようにセレニーへの言及はこの総括的な一節以降に言わば番外として現れ、この作品においては〈失われた愛〉の主題が無限に変奏可能なテーマとして提示されていることを示す。

この点を敷衍して「散策と回想」の独自性を強調してみたい。まず指摘しておかねばならないのは、この作品には特権的な〈愛〉の対象は描かれないという点である。個々の女性の扱いには多少の疎密は認められるものの、これらの女性たちは全体として見ればいずれも語り手の人生のそれぞれの時期における挿話的な〈愛〉の対象であるに過ぎない。同様に〈失われた愛〉の周囲に物語を紡ぐ作品であると言える「シルヴィ」と比較してみれば、「散策と回想」に描かれた〈愛〉がいかに拡散的な性格を帯びているかが明瞭になろう。「シルヴィ」における〈愛〉の対象はアドリエヌ、シルヴィ、オーレリーという3つの特権的な名を持つが、最初の2つの名が「散策と回想」にも言及されることは既に指摘した。ネルヴァルがこれら2つの作品にまたがる名前にどのような関連づけを意図していたかは不明だが、「散策と回想」におけるアドリエヌとシルヴィが全く内実を欠いていることだけは確かである。「シルヴィ」に描かれる〈失われた愛〉はアドリエヌへの〈天上的な愛〉とシルヴィに対する〈地上的な愛〉の2種類の〈愛〉に集約されると言えるが、「散策と回想」において多少ともアドリエヌに近い描き方をされているのはエロイーズと言ってよかろう。エロイーズは語り手によって〈女王〉に譬えられるが、アドリエヌもまた王族の末裔として描かれていたからである。しかし上の引用箇所に見られるようにエロイーズはその後結婚し、修道院で生涯を終えるアドリエヌよりもむしろ語り手の乳兄弟と結婚するシルヴィとの類比が浮上する。そのシルヴィの幼少女期が「散策と回想」においてはセレニーのそれとして描かれていることは明白である。更に2つの作品の比較を続ければ、「シルヴィ」でアドリエヌとの同一性が指向されるオーレリーに該当するのはその〈女優〉という属性を通じてヌーヴェル嬢

ということになるであろうが、この女性も挿話的な域に閉じ込められたおよそ特権的とは言えない存在である。結局「シルヴィ」において2方向的に整理され、「オーレリア」において更にオーレリアからオーレリアへと1人の女性に絞り込まれていく〈愛〉の対象は、「散策と回想」においては無数の女性たちへと拡散し続けていくのである。

ところで、「散策と回想」における〈回想〉の中心主題は確かに女性への〈失われた愛〉であるが、それは思い出の土地ヴァロワを通じてより包括的な肉親への〈愛〉へ、更に土地そのものへ、国家へと媒介されていく。第7章の後半部で「私の幼少年期と親戚たちの思い出をもう一度見いだす」(687ページ)のためにポントワーズからサンルーへ移動しながら、語り手は次第に濃厚になってくる郷愁を通して「父親の土地は2倍の意味で祖国なのである」(同所)という言葉に要約しうる、人間と土地の絆をめぐる省察に導かれる。

——私自身の中にいる他人を研究しようと努めている私は、土地への愛着には家族に対する愛が多く含まれていると思う。場所に結びつくこの恩愛はまた我々を祖国に結びつける高貴な感情の一部でもある。[中略]あなた方は、なぜ私がこの土地のすべての人を愛するのかと言われるのか。ここでは昔よく耳にした抑揚を再び耳にし、年老いた女たちは私をあやしてくれた老婆たちの顔立ちをしており、若者や娘たちは私の青春が芽生えた頃の遊び仲間たちを思い起こさせてくれるのである。(687～688ページ)

「散策と回想」における〈失われた愛〉の対象が及ぶ範囲上のマクシマムがここには示されている。すなわち土地に対する愛着を媒介にした〈祖国愛〉<sup>(19)</sup>である。この省察には個人的な経験の領域に属する事柄を、例えば〈祖国愛〉というようなある種の抽象的・普遍的な問題に及ぼそうとする指向性を読み取ることができるが、第4章冒頭に置かれた次の引用箇所でも語り手はその意図を明瞭に語っている。

私の人生では偶然があまりにも大きな役割を演じてきたので、偶然が私の誕生を司った奇妙なやり方を思ってみても、私は驚いたりもしない。そんなことは誰にもある話だと言われることだろう。しかし、誰もが自分の話をする機会に恵まれるわけではない。

また、銘々が自分の話をするとしても大して悪いことはあるまい。銘々の経験は万人の宝なのである。(679ページ)

ここに見られる「銘々の経験は万人の宝なのである」という警句めいた言葉が上述の語

り手の意図を明白に示しているが、こうした意図は『ボヘミアの小さな城』の「ひとりの詩人の生涯は万人の生涯なのである」(399ページ)という類似の表現に見られるように、晩年のネルヴァルのひとつの固定観念と言ってよい。「オーレリア」はこの同じ固定観念を壮大な規模でひとつの物語に仕立て上げたものだと言えよう。またこの一節で語り手の人生と〈偶然〉の密接な関係が強調されていることは「散策と回想」を支えると筆者の考える〈拡散〉の原理との関連で注目に値する。<sup>(10)</sup>「シルヴィ」と「オーレリア」では〈失われた愛〉の対象が特定の女性に収斂するのに対し、この作品ではそれが多くの女性に拡散していくと述べたが、〈収斂〉は〈必然〉を〈拡散〉は〈偶然〉を前提とするからである。

### 完結性の問題

「散策と回想」の〈完結性〉の問題は「オーレリア」のそれに直結している。それぞれ掲載された雑誌は異なるがほとんど同時期に連載され、しかもネルヴァルがその終了を待たずに死んでしまうからである。ネルヴァルはこれらの作品の全体に責任を負えるのか、これらの作品は作者の意図通りの形で残されたのか、というのがこの問題の要である。

「オーレリア」の現在最も新しい版(プレイヤード新版『ネルヴァル全集第3巻』所収)の校訂者であるジャン・ギヨームは、その〈解題〉の中で、「もしジェラルド・ド・ネルヴァルが『オーレリア』を仕上げることができたとすればこの作品がどのようなものになっていたか、今後とも決して明らかになることはあるまい。この作品は終わってはいるが完成されてはいないのである」(1325ページ)とその未完結性を強調している。「オーレリア」の未完結性の問題のひとつの焦点は第2部(この2部構成自体に既に問題がある)第6章に残された空隙の処理の問題であるが、「パリ評論」誌掲載の初出テキストでは空隙のままに残された箇所、同誌の編集責任者であった友人のテオフィル・ゴーチエとアルセーヌ・ウーセは、単行本『夢と人生』(ミシェル・レヴィ書店、1855年)を編むに当たって恣意的な選択になる書簡を挿入した。爾来ゴーチエ、ウーセの責に帰せられるこの処置は今日では退けられるのが通例であるが、これに代わる代案はなく、ギヨームの版でもその箇所は元通り点線によって示されている。この点ひとつ取ってみても「オーレリア」は明らかに未完結の作品であると言わざるを得ない。

他方「散策と回想」の場合は、セリエの3部構成を採れば最後のパートに1章が欠け、その点が未完結の根拠のひとつに数えられることになることは既に述べたが、仮にネルヴァル自身が明白に3部構成を指向していたとしても各パートが必ずしも均等な章割りになる必要はないわけであり、さして説得力のある根拠とは言えない。何よりも、「オーレリア」に見られる空隙のような決定的な未完成の要素はこの作品には見いだされない



のである。しかし、ネルヴァルには第9章を書いて量的な意味でのバランスをこの作品に与える意図はなかったとする根拠もまたないわけで、「散策と回想」に関する〈完結性〉の問題は最終的には推測の域を出ない解答不能の問題<sup>(17)</sup>と言わざるを得ない。

ただ、「散策と回想」の語り手がその構想のモデルであることを公認しているルソーの最後の作品『孤独な散歩者の夢想』の同様の問題について中川久定氏が行なっている指摘がきわめて示唆的なので紹介しておきたい。中川氏はその著『甦るルソー——深層の読解——』の中でこの作品を構成する各章（全10章）の量的な問題に触れ、他の章に比べて最終章が量的に僅少であることから「その点だけからいえば「未完」とみなすべきなのかもしれない」とした上で、「だが、レ・シャルメットのあの永遠の愛をこのテキストの時空のなかに完全に封じ込め終ったルソーのうちに、封印を破ってさらにこの先を書き続ける意志があったのであろうか<sup>(18)</sup>」と従来の〈未完結〉説に疑義を呈し、この箇所<sup>(19)</sup>に付された註では更に「このテキストは、素材——歴史的事実——の物語として見れば未完であるが、願望——自伝的事実——の物語として見る限り完成しているのである」と一歩踏み込んでその〈完結性〉を主張されている。詳細は省くが、この中川氏の議論は筆者にはきわめて説得的であり、ほぼ同様の論拠で「散策と回想」についても当てはまると思われる。すなわち、最終章の段階でこの作品の主題（〈失われた愛〉）は展開し尽くされており、仮に第9章が書かれたとしても主題的には何も付け加えるべきものがないと考えられるのである。また既に指摘したように、語り手は第3章の末尾でこの物語をルソーが死んだ土地で仕上げるつもりだと言明しているが、最終章では語り手はサンリスにおり、ルソーの死んだエルムノンヴィルのすぐ近くにまで来ている。この点からも「散策と回想」の完結性をある程度主張できよう。第9章ではエルムノンヴィルに場所を移す積もりだったのではないかとの反論もありうるかもしれないが、語り手は一度もこのルソーの実際の終焉の地に言及してこなかったのに対し、サンリスに関してはそこがヴァロワ散策の最終目的地であることが再三指示されてきた点を思い出していただきたい。主題面からのみならず構成面からもこの作品の整合性を確認できると考える。

### 自伝としての「散策と回想」

筆者がこの作品について主張しておきたいもうひとつの論点は「散策と回想」を〈自伝〉として捉えることである。この観点からの研究にガブリエル・マランダン女史の研究を挙げることができる。マランダンも筆者同様フィリップ・ルジュンヌの研究を基礎にこの問題にアプローチしているが、彼女も言うように、ルジュンヌ自身はネルヴァルの作品が自伝であるとは考えていない<sup>(20)</sup>。ルジュンヌは〈自伝〉を厳密に定義し、その要件を〈自伝契約〉と呼ぶのであるが、その要点は〈作者〉＝〈語り手〉＝〈登場人物〉の

同一性の明示的な確保ということにある。<sup>(21)</sup> ネルヴァルの〈自伝的な作品〉では確かに概ね、殊更明示的な形ではこの契約がなされない。しかし既に筆者が指摘したことがあるように、物語の細部においてなされた言及から「アンジェリック」においては直接的に、『ボヘミアの小さな城』においては間接的に〈自伝契約〉が成立することが確認された。問題は「散策と回想」においても同様のことが言えるかどうかということである。筆者は嘗て、〈失われた愛〉の対象として語り手の挙げる虚構の女性名に幻惑されて「散策と回想」は厳密な意味での〈自伝〉とは言えないと考えた。しかし実際にはこの作品でも、語り手の身元にかかわる情報は「アンジェリック」や筆者が同じく〈自伝〉と考える『ボヘミアの小さな城』と同程度には与えられており、フィリップ・ルジュンヌの言う〈自伝契約〉が間接的には成立しているのである（直接的に成立するためには語り手はジェラルド・ド・ネルヴァルを名乗らねばならない）。以下に、「散策と回想」を〈自伝〉と見なしうる根拠を列举してみよう。

(1) 母親の名前がマリ＝アントワネット・ローランスであり、25歳の時、従軍先のシレジアで亡くなり、グロス・グロガウのポーランド・カトリック墓地に埋葬されたことが語られている点（第4章）。

(2) 「クレオール」と呼ばれていた若い刺繍女工に捧げられたとされるホラチウスのオード「チンダリスに」とバイロンの歌曲の韻文訳、実例が引かれているトマス・ムーアの歌曲を模倣した自作詩が、ネルヴァル自身の作品として実在している点（第6章）。

(3) 最近のこととして、アレクサンドル・デュマが「私の青春の頃の気違い沙汰」（686ページ）を潤色して書いたことが語られている点（第7章）。

(1)の母親の旧姓には若干の変更がなされている。<sup>(24)</sup> つまりネルヴァルの母方の姓は実際は〈ローランス〉(Laurence)ではなく〈ローラン〉(Laurent)なのである。しかし、この変更もささやかな語尾修正であり、その他の事項は今日知られている事実<sup>(25)</sup>に合致している。(2)の「チンダリスに」は、現存するネルヴァルの自筆草稿「雑詩集」(*Poésies diverses*)中に1編と「詩と詩編」(*Poésies et poèmes*)の中に2編(内1編は「雑詩集」中のものと同一作品)収録されている。<sup>(26)</sup> テクストの挙げられている〈バイロンの歌曲〉の翻訳は現在までのところ発見されていないが、これとは別にネルヴァルの手になるバイロンの翻案は存在している。<sup>(27)</sup> トマス・ムーアの歌曲の模倣詩も3度発表されたことが知られている。<sup>(28)</sup> また、(3)のアレクサンドル・デュマが語り手の「青春の頃の気違い沙汰」について書いたというのは1854年7月7日号の「ペイ」紙に発表された「一旅行者の閑談」(*Causeries d'un voyageur*)を指すと指摘されている。<sup>(29)</sup> 筆者の気のついた以上の3点からだけでも、「散策と回想」の語り手をネルヴァル自身と同一人物とすることに問題はあまい。したがってこの作品を、「アンジェリック」『ボヘミアの小さな城』に続

くネルヴァルの3つ目で最後の〈自伝〉と言って差し支えないと考える。<sup>30)</sup>

## 「オーレリア」と「散策と回想」の関係

ネルヴァルの〈自伝的な作品〉の流れは〈狂気〉に課した禁忌を全面的にほどくこと<sup>31)</sup>で一気に「オーレリア」という奇跡的な作品の中に急速に収斂し、見事な構成を備えた物語を構築する。「オーレリア」の語り手は、その人生の途上に介入した〈狂気〉の体験を〈病気〉という当たり障りのない言葉に置き換え、これを更に〈夢〉という語に置き直すことで、自らに課された〈試練〉の物語に変容させる。〈試練〉の克服の向こうには語り手の〈魂の救済〉が措定され、これを介して更に語り手の同胞たる人類一般の〈救済〉が予告されるに至る。こうして「オーレリア」はネルヴァル個人の〈自伝的な作品〉という枠組みを一挙に突き抜け、この作品のモデルのひとつに擬されたダンテの『神曲』、あるいはネルヴァルがその第1部の翻訳を文学的な出発のひとつに数え、絶えず手直しの労を加えて不十分ながら第2部の翻訳も成し遂げた『ファウスト』にも比肩する普遍性のレベルに到達する。そこには『ボヘミアの小さな城』の序文に書かれた例の「詩人の生涯は万人の生涯である」という確信の最も実り豊かな実現が見られる。

しかし、この感嘆すべき収斂は直線的なもの（形而上的なレベルの〈下降〉と〈上昇〉という垂直運動）であり、そこに成就される〈救済〉も最終的には作家の確信に属する問題であるが、ネルヴァルは決してこのような劇的な構想力にのみかかわる型の作家ではない。と言うかむしろ逆で、「オーレリア」はこの作家にとって言わば例外的・特権的な作品なのだと考えた方がよい。作家自身そのことを自覚していたと考えなければ、この極めて集中力を要するに違いない作品を書きながら、同時に一方で「散策と回想」のような全く異質な作品を書くはずがないからである。「散策と回想」は、先に引いた『ボヘミアの小さな城』序文の別の箇所にある「取るに足りない散文作家」(399ページ)あるいは「頑なな散文作家」(同所)という控え目な自己規定の延長線上に位置する作家によって書かれた作品である。「散策と回想」にはこれと同主旨の言葉が見られるし、<sup>32)</sup>「我々がこのような自己本位の書き方をするのをどうか赦して貰いたい」(686ページ)という言葉に象徴されるように、この作品の語り手は徹頭徹尾私事に拘泥し、その周囲に物語を紡いでいく。家系を辿り幼少年期を回想し〈失われた愛〉を嘆く。ただそれだけである。

結論として言えることは、ネルヴァルがその生涯を終えるに当たって事実上最後の作品となると考えた2つの作品を異なった、と言うよりもむしろ相補的な原理に則り、しかも同一の素材すなわち自分自身の人生という素材を用いて、意識的に書き分けているということである。ネルヴァル自身にとってそのうちのどちらがより重要ということとは

ない。これは作家の〈型〉に属する問題である。<sup>83)</sup>「オーレリア」のような作品を書いてしまった、あるいは書きつつある作家は、通常もはや別の作品を書けないのではあるまいか。何を書いてもこの究極の作品の強度を弱めてしまうという意味で。しかしネルヴァルは「オーレリア」という作品を書く内的必然性に駆られ、これを書くためにのみ生きてきたときえ言えるかもしれないが、これのみをもって自己の最終的な姿としたいくないという意向もまた同時に抱いていたと考えざるを得ない。それを〈一方向性の忌避〉と呼ぶことも許されよう。「散策と回想」はその作品形式の似通いにより、過去の作品の参照を要請する。〈自伝的な作品〉群を内的な発展に支えられた直線的・一方向的な構造に閉じ込めるのではなく、もう一度任意の別の作品に送り返す、言わば円環構造的なものとして開放することが死を目前に控えたネルヴァルの最後の意向であったと考えざるを得ない。

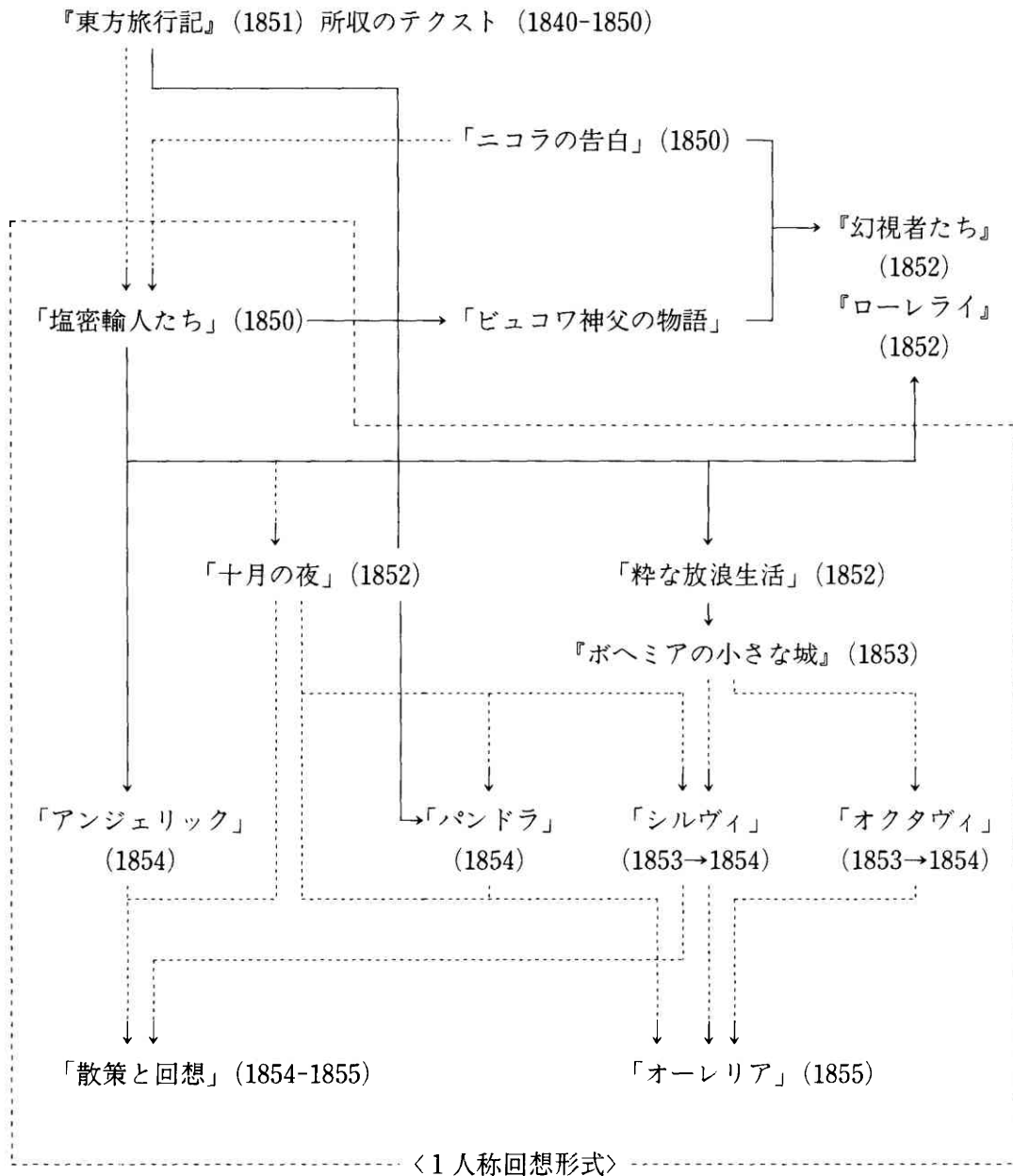
### 1850年以後の〈自伝的な作品〉群における「散策と回想」の位置

本稿で、不十分ながら筆者が嘗てネルヴァルの〈自伝的な作品〉としてリスト・アップした作品<sup>84)</sup>の個別的な分析を一巡したことになるので、最後に、筆者が作成したネルヴァルの〈自伝的な作品〉群の関係図を参照しながら、現在筆者の考える〈自伝的な作品〉の流れを一瞥し、その流れの中に「散策と回想」の占めるべき位置を確定して論を終えたい。

ネルヴァルの晩年（1850年～1855年）に書かれた散文の作品群を特徴づけるものの第1は1人称回想形式（語り手〈私〉による語り手自身の過去の物語）であるが、筆者は嘗てこの作品形式の淵源を、1851年に『東方旅行記』に集大成される一連の紀行文（1840年～1850年）と、同じく1852年に『幻視者たち』にまとめられる伝記執筆（1839年～1851年）に求めた。<sup>85)</sup>この作品形式は、具体的には1850年の10月24日から12月22日まで26回にわたって「ナショナル」紙に連載された「塩密輸入人たち」前半部で、語り手自身の過去の記述の本筋への介入を契機として生じるが、その直前まで「両世界評論」誌に連載されたレチフ・ド・ラ・ブルトンヌの伝記「ニコラの告白」（『幻視者たち』所収）がこの作品に及ぼした影響には測り知れないものがあることも再度指摘しておきたい。<sup>86)</sup>

「塩密輸入人たち」はその後半部（第19回から第26回までの連載部分）が「ビュコワ神父の物語」として『幻視者たち』（1852年）に収録され、前半部の大半（第1回、第2回と第6回から第18回までの連載部分）が「アンジェリック」として『火の娘たち』（1854年）に収められるが、その一部は既に1852年に「粹な放浪生活」にも収録されていた。したがって、「塩密輸入人たち」というネルヴァルの〈自伝的な作品〉の祖型となった作品からは、その主流として「アンジェリック」が、傍流として「粹な放浪生活」が派生し

ネルヴァルの〈自伝的な作品〉群の関係図



実線(—)は作品間の直接的な影響関係を表し、点線(---)は間接的な影響関係を表す。

たと言える。しかし、年代的には傍流の「粹な放浪生活」がまず「アルチスト」誌に書かれ(1852年7月1日から12月15日まで12回にわたって連載)、その連載期間中に、この流れとは別系統の「十月の夜」が「イリュストラシオン」誌に連載される(10月9日から11月13日まで)。「粹な放浪生活」からは更に『ボヘミアの小さな城』(1853年)という

作品が生じる。

この辺りで、ネルヴァルの〈自伝的な作品〉は3つの系統に分岐すると考えることができる。すなわち、ヴァロワ地方の〈散策〉が〈回想〉を喚起するというモチーフを定着させた「塩密輸入人たち」の（やがて「アンジェリック」になる）前半部と、〈夢〉を初めてモチーフとして浮上させた「十月の夜」、〈女優〉を〈失われた愛〉の特権的な対象としてクローズ・アップさせた「粹な放浪生活」の3系統である。第1の系統は、その後「アンジェリック」を経由して「散策と回想」に結晶することになる。第2の系統は、〈夢〉あるいは〈狂気〉のモチーフに導かれて「シルヴィ」「パンドラ」（1854年）を経て「オーレリア」へと至る。第3の系統は、〈女優〉のモチーフを介して『ボヘミアの小さな城』と「シルヴィ」（その姉妹編としての「オクタヴィ」）を経てやはり「オーレリア」へと直結する。概略このように整理できると思うが、更にこの3系統は、〈散策〉と〈回想〉の因果関係を前面に押し出すと共に〈失われた愛〉の対象を特権化しない作品グループ（「塩密輸入人たち」「十月の夜」「アンジェリック」「散策と回想」）と、語り手の〈人生〉を〈失われた愛〉のモチーフを中心に統一的な相の下に置き、その対象を〈女優〉に絞り込んでいこうとするグループ（「粹な放浪生活」『ボヘミアの小さな城』『オクタヴィ』『シルヴィ』『パンドラ』『オーレリア』）に分類することができるのではないだろうか。

もしネルヴァルが最晩年に一貫して採り続けた1人称回想形式による〈自伝的な作品〉を上述したような2つのグループに集約することができるとすれば、「オーレリア」と並行して「散策と回想」が書かれねばならなかった理由も自ずから説明がつくと思われる。ネルヴァルが自覚的に選び取った〈1人称回想形式〉というジャンルの制約の中で、限られた素材に与えたヴァリエーションを筆者なりに整理していくと、「オーレリア」に奇跡的な達成を見た〈収斂〉の原理と「散策と回想」に見られる〈拡散〉の原理とが融和し難い2つの核として最終的に残るという結論に達さざるを得ない。

筆者はまだ関係図に示した作品のうちでさえ、「塩密輸入人たち」『東方旅行記』『幻視者たち』『ローレライ』『パンドラ』について本格的に論じたことがない。既に扱った作品も含めて今後個別研究を継続し、その過程で上述の主旨を検証していきたい。

## 註

- (1) 「散策と回想」を始めとするネルヴァルの作品からの引用は次の版に依り、筆者の試訳を掲げる。

Gérard de Nerval, *Œuvres complètes III*, édition publiée sous la direction de Jean Guillaume et de Claude Pichois, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1993.

*Promenades et souvenirs*, texte présenté, établi et annoté par Claude Pichois.

*Angélique*, texte présenté, établi et annoté par Jacques Bony.

*Petits Châteaux de Bohême*, texte présenté, établi et annoté par Jean-Luc Steinmetz.

上記プレイヤード新版『ジェラルール・ド・ネルヴァル全集第3巻』所収のテキストが現在のところ「散策と回想」の最新かつ最良の版であるが、依然として依拠すべき「イリュストラシオン」誌のテキストを忠実に再現しているとは言えない（「イリュストラシオン」誌のコピーを提供してくださった水野尚氏に感謝したい）。なお、この全集版の校訂協力者のひとりであるジャック・ボニ（第1巻所収の「ファイヨル侯爵」、第2巻所収の「塩密輸入人たち」、第3巻所収の「粹な放浪生活」の単独校訂および第3巻所収の『ローレライ』『短編と諧謔』『火の娘たち』の共同校訂者）は、レオン・セリエの定評ある旧版の跡を継いだガルニエ・フラマリオン新版ネルヴァル作品集に、場合によってはプレイヤード新版を凌ぐとも言う「散策と回想」の優れた校訂版を収めており、ピショワはしばしばボニの註を自註に取り入れていることも指摘しておきたい（Gérard de Nerval, *Aurélia et autres textes autobiographiques*, édition de Jacques Bony, GF-Flammarion, 1990）。また、作品の表題の表記は校訂者により *Promenades et Souvenirs* と *Promenades et souvenirs* とに分かれるが（強調筆者）、「イリュストラシオン」誌では *souvenirs* となっている（ピショワは後者を採りオリジナルに忠実であるが、遺憾ながらボニは前者を採っている）。

(2) Albert Béguin, *Gérard de Nerval*, José Corti, 1945. 特にネルヴァルの最晩年の状況を論じた巻頭論文「ジェラルール・ド・ネルヴァルと地獄下り」（《Gérard de Nerval et la descente aux enfers》）ではベガンは終始「オーレリア」を問題にしており、「散策と回想」に対する言及はほとんど見られない。

(3) 筆者が参照した「散策と回想」に関する文献は以下の通りである（本稿に言及したものは・の印を付した）。

Raymond Jean, 《Le vert paradis de Gérard》, *Cahiers du Sud*, No292, 1948.

・ Ross Chambers, *Gérard de Nerval et la poétique du voyage*, José Corti, 1969. (chapitre VI : Les cercles du temps : *Promenades et Souvenirs*, pp. 187-219)

・ Léon Cellier, 《Préface》 in Gérard de Nerval, *Promenades et Souvenirs, Letters à Jenny, Pandora, Aurélia*, Garnier-Flammarion, 1972.

Monique Streiff Moretti, *Le Rousseau de Gérard de Nerval*, R. Pâtron/A. G. Nizet, 1976. (chapitre XI. *Promenades et souvenirs* : de la solitude au témoignage, pp. 405-438)

・ Gabrielle Malandain, *Nerval ou l'incendie du théâtre. Identité et littérature dans l'œuvre de Gérard de Nerval*, José Corti, 1986. (chapitre 3 : La scène autobiographique, pp. 99-123)

・ 大浜甫 「『散策と回想』について」（『慶應義塾大学日吉紀要フランス語フランス文学』第4号、1987年、第6号、1988年）

Bruno Tritsmans, *Textualités de l'instable. L'écriture du Valois de Nerval*, Peter Lang, 1989. (V. Le Valois idyllique de *Promenades et Souvenirs*, pp. 163-214)

・ Jacques Bony, 《Introduction》 pour *Promenades et Souvenirs* et 《Notice》 in Gérard de Nerval, *Aurélia et autres textes autobiographiques*, GF-Flammarion, 1990.

・ Glaude Pichois, 《Notice》 pour *Promenades et Souvenirs* in Gérard de Nerval, *Œuvres complètes III*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1993.

(4) ジャック・ボニは次のように指摘している。「『オーレリア』をジェラルールの究極の作品であり到達点であり精神上の遺言であると考えれば、ネルヴァル作品の持つ全般的な意味を捉え損ねることになるだろう。これまであまりにも多くの人々がそう考えてきたのだが、彼らは『散策と回想』が年譜的に（『オーレリア』と）同じ場所を占め、同じ未完結性を示していることを忘れていたのである。1976年のマルサン売り立ての折りに再び姿を見せた自筆

草稿には、一時期ネルヴァルがこの作品に『オーレリア』と類似の方向性を与えていた証拠が見られる」(ガルニエ・フラマリオン新版ネルヴァル作品集、29ページ)。この指摘は筆者が本稿で主張したいことの核心を簡潔に言い表わしている。

- (5) 「散策と回想」の執筆時期については、作品冒頭部に近い「ドイツから帰ってきて郊外の別荘に短期間滞在したのち、私は以前のよりもっと確実な住まいを探し始めた」(667ページ)という文中に見られるドイツ旅行からの帰着が1854年7月下旬のことと推測されることから、この時期から発表時期にかけての5カ月間に書かれたと考えられる(セリエ校訂ガルニエ・フラマリオン旧版ネルヴァル作品集、12ページ参照)。なお本文・註を問わず、ネルヴァルのテキストの引用はその都度ページ数のみを示す。
- (6) 「散策と回想」と「オーレリア」の発表される少し前の1854年10月31日に「銃士」紙に前半部が発表され、後半部分は校正刷りの状態のまま残された作品「パンドラ」も最晩年のネルヴァルを考える上で重要な作品であるが、その最終的な執筆時期は発表時期に一年遡ると推測され、その点若干事情が異なるので本稿では扱わない。
- (7) 章題は次の通りである。

I. —LA BUTTE MONTMARTRE.	} le 30 décembre 1854
II. —LE CHATEAU DE SAINT-GERMAIN.	
III. —UNE SOCIÉTÉ CHANTANTE.	
IV. —JUVENILIA.	} le 6 janvier 1885
V. —PREMIÈRES ANNÉES.	
VI. —HÉLOÏSE.	
VII. —VOYAGE AU NORD.	} le 3 février 1855
VIII. CHANTILLY.	

「イリュストラシオン」誌のテキストと比較すると、ピショワが校訂したプレイヤード新版のテキストにはチレ(一)と章題末のプワン(,)が脱落しているが(最終章の章題のチレは「イリュストラシオン」誌のテキストでも欠けている)、ボニ校訂のガルニエ・フラマリオン新版の方はプワンのみ脱落している。

- (8) 例えばジャック・ボニは「散策と回想」と「オーレリア」を共に未完結の作品と考えている。註(4)を参照。
- (9) Léon Cellier, *op. cit.*, pp.12-13.
- (10) 「散策と回想」を先行作品「アンジェリック」あるいは「十月の夜」の系譜に位置づける理由はこの語りのシステムにある。
- (11) チェインバーズは第1章で語られるモンマルトルを「過去への旅の第1段階」と規定している(『ジェラルド・ド・ネルヴァルと旅の詩学』、192ページ)。大浜氏は〈回想〉への方向性は第2章から始まると考えておられるようである(「慶應義塾大学日吉紀要フランス語フランス文学」第4号、294(11)ページ)。
- (12) チェインバーズは〈住居探し〉のモチーフに「夜型人間が失った無垢を自分自身の中に再発見」しようとする「野心」を見、積極的な評価を与える(上掲書、191ページ)。
- (13) 「人生の半ばに達すると幼少年期の思い出が蘇ってくる。——それは、化学的な手続きによって(消された)文章を再び出現させる羊皮紙の草稿のようなものである」(489ページ)。
- (14) 註(4)に引用したボニの所見の後半に見られるように、自筆草稿には「散策と回想」と「オーレリア」の構想が入り混じっていた段階があったことを示す箇所があることに注意を喚起したい。
- (15) ただこの省察がそうした抽象的な次元に留まらず、そのまま自然に「私を愛してくれ、私を可愛い夫と呼んでくれた農夫の娘」(688ページ)セレニーの個人的な思い出に移っていくところに、ネルヴァル的な〈回想〉のシステムを見て取ることができよう。



- (16) 「散策と回想」には語り手の〈人生〉を支配する〈偶然〉(hasard)という観念がもう1箇所見られる(第7章)。「私はパリが大好きだが、私がそこに生まれたのは偶然のせいである。[中略]南フランス出身の男が、パリで偶然に北フランス出身の女と一緒にいても、ルテチアの気質を持った子を設けるといふわけにはいかない」(687ページ)。「散策と回想」に見られる人生を支配する〈偶然〉という観念は、「オーレリア」の物語を規制する〈宿命〉(destin)という観念と対立する。〈偶然〉という観念は、ネルヴァルがこの作品の基底に据えている〈拡散〉の原理に見合うものであると言える。
- (17) プレイヤード新版『ネルヴァル全集第3巻』所収の「散策と回想」を校訂したクロード・ピショワは、その〈解説〉で「『散策と回想』の発表はネルヴァルの死後完結する。一体この作品は仕上がっているのだろうか。上述したように、最初の文章(「パリで住む所を探すのは本当に難しい」、667ページ)と最後から2つ目の文章(「パリの住まいが見つからないのなら、なぜこのさ迷える家に留まらないのか」、691ページ)を比較すれば完結しているように思える。これとは別の意味でも完結しているような印象を与える。すなわち完全に抑制されているという印象であるが、これは『散策と回想』と同時期の『オーレリア』には見られない印象である」(1310ページ)と、控え目ながらその〈完結性〉を主張している。一方ジャック・ボニは註(8)でも指摘したように〈未完結〉の立場を採っている。
- (18) 中川久定『甦るルソー——深層の読解——』(岩波書店、1983年)、307ページ。
- (19) 同書、311ページ。
- (20) Gabrielle Malandain, *Nerval ou l'incendie du théâtre*, p. 100. Cf. Philippe Lejeune, *L'Autobiographie en France*, A. Colin, 1971, pp. 106 sqq. 筆者自身はルジュンヌのこの処女作を見ていないのであるが、ルジュンヌの『自伝契約』(Philippe Lejeune, *Le pacte autobiographique*, Seuil, 1975)がネルヴァルに全く言及しないことを不思議に思っていた。
- (21) Philippe Lejeune, *Le pacte autobiographique*, Seuil, 1975, p. 26. また拙稿「Nervalの晩年の作品に見られる自伝性の問題」(GALLIA XXI-XXII、大阪大学フランス語フランス文学会、1984年3月発行)、131ページ参照。
- (22) 拙稿「Augélique —— Nervalの最初の自伝——」(GALLIA XXIII、大阪大学フランス語フランス文学会、1984年3月発行)および「Petits Châteaux de Bohême —— NERVALの最後の自伝——」(「待兼山論叢」第18号、大阪大学文学会、1985年1月発行)参照。
- (23) 拙稿「Nervalの晩年の作品に見られる自伝性の問題」(GALLIA XXI-XXII、大阪大学フランス語フランス文学会、1983年3月発行)、134ページ参照。
- (24) 例えば、筑摩書房版『ネルヴァル全集I』所収の中村真一郎・入沢康夫訳「散策と回想」の邦訳テキストには「私の母はマリ=アントワネットという名をローランという姓といっしょに付けられた」(308ページ; 強調筆者)とある。ところで、ガブリエル・マランタンはこの〈ローランス〉を3つ目の洗礼名と解釈している(註(20)の上掲書108ページを参照)が、原文では《*ma mère reçut le nom de Marie-Antoinette avec celui de Laurence*》(強調筆者)となっており盲点を突かれた感じである。マランタンは〈ローラン〉(Laurent)という姓が〈ネルヴァル〉(Nerval)という筆名のアナグラムになっているという文脈でこの指摘を行っており、この仮説を強調する根拠として〈ローランス〉という洗礼名に言及しているのである。しかし伝記的にこのような事実はなく、〈ローランス〉を姓と取るか洗礼名と取るかは別にして、ここにネルヴァルの施した虚構を見ることに変わりはない。
- (25) 下記の伝記を参照。  
Aristide Marie, *Gérard de Nerval. Le Poète. L'Homme*, Hachette, 1914.  
Pierre Petitfils, *Nerval*, Julliard, 1986.
- (26) 《À TINDARIS》in *Poésies diverses et Poésies et poèmes*; 《ODES D'HORACE À TINDARIS》in *Poésies et poèmes* (Textes présentés, établis et annotés par Claude

- Pichois in Gérard de Nerval, *Œuvres complètes I*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1989. Voir p. 18, p. 77-78).
- (27) 《À NAPOLEON/Traduit de Lord Byron》in *Poésies diverses*; 《ODE À L'ÉTOILE DE LA LÉGION D'HONNEUR/Imitée de L. Byron》in *Élégies nationales et satires poétiques* (*Ibid.*, p. 8-9, p. 192-194). Voir aussi Gérard de Nerval, *Œuvres complètes III*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1993, p. 1320, note 5 de p. 683.
- (28) Gérard de Nerval, *Œuvres complètes III*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1993, p. 1320, note 4 de p. 683.
- (29) *Ibid.*, p. 1322, note 2 de p. 686.
- (30) 嘗て筆者は『ボヘミアの小さな城』をネルヴァルの最後の自伝として論じた(「待兼山論叢」第18号文学篇所収の「*Petits Châteaux de Bohême*——NERVALの最後の自伝——」大阪大学文学会、1985年1月発行)が、副題を「NERVALの第2の自伝」とした上、内容の一部を修正せねばならない。すなわち、ネルヴァルは最晩年に至ってその最後の作品のひとつを再び〈自伝〉として書くのである。
- (31) ネルヴァルは、「オーレリア」においてその狂気体験に正面から取り組む前に、「十月の夜」の中でその中核となる〈夢〉の体験を、「シルヴィ」では「オーレリア」の冒頭部を思わせる〈覚醒〉から〈睡眠〉への移行状態を記述し、最晩年に属する未完の作品「パンドラ」においてもきわめて異常な〈夢〉の体験を記している。
- (32) 「そこには詩人を産むに足る何ものがあつたが、私は今散文を専らとする夢想家であるに過ぎない」(第4章、681ページ)。
- (33) 「散策と回想」第7章冒頭で、ネルヴァルは〈作家〉としての自己が属する〈型〉を「私は、それを書いたために人に知られるようになった作品と人生が緊密に結び合っている作家のひとりなのである」(685~686ページ)と明確に規定している。またこれを敷衍して「それに、たとえそう望まない場合でも、我々は直接的なあるいは偽装された伝記の題材なのではあるまいか」(686ページ)と自己正当化とも取れる言葉を述べ、続けて「レリオとかオクターヴとかアルチュールという名前の陰に隠れて小説の中で自分自身を描いたり、一卷の詩集の中で自分の最も私的な感情を明かしたりする方がより慎み深い行為だと言えるのであろうか」(同所)と〈個人小説〉(roman personnel)やロマン主義の詩を暗に批判し、〈1人称回想形式〉による作品(ネルヴァルは「散策と回想」中では〈回想〉*Mémoires*という用語を使用している)の地位を要求する。ここには〈作家〉としての自己の資質を適確に見抜き、これを積極的に擁護しようとするネルヴァルの自負を見ることができよう。マランダンも指摘するように(上掲書、100ページ)ネルヴァルの生きた19世紀の前半には〈自伝〉という言葉そのものは存在したが、ルジュンヌが峻別するような意味での区別をネルヴァルの使用する〈回想録〉という用語との間に持っていなかったことは指摘しておかなければならない。ネルヴァルは上述の自覚を通じて、今日の文学ジャンルの研究者が定義する〈自伝ジャンル〉の条件そのものを無意識のうちに模索していたのだと言うこともできよう。
- (34) 拙稿「Nervalの晩年の作品に見られる自伝性の問題」(*GALLIA XXI-XXII*、大阪大学フランス語フランス文学会、1983年3月発行)、131ページ参照。
- (35) 同上、129~131ページ。
- (36) 拙稿「*Les Nuits d'octobre*——仮装された自伝——」(*GALLIA XXIII*、大阪大学フランス語フランス文学会、1987年3月発行)、39~40ページ参照。また、ネルヴァル晩年の〈自伝的な作品〉群について、筆者と類似の問題をより周到綿密に論じた水野尚氏の一連の論考があることを指摘しておきたい。水野氏の研究については以下の論文を参照。「晩年のNerval(1)《自己を描く大胆な計画》」(常盤大学人間科学部紀要第3巻第1号、1985年11月発行)、「晩年のNerval(2)《時の重層化》——*Lorely*——」(慶應義塾大學藝文學會「藝文研究」第48号、

「散策と回想」—— ネルヴァルのもうひとつの最後の作品 ——

1986年発行)、「晩年の Nerval (3)—— 《Sylvie》と《La Nouvelle Héloïse》」(神戸海星女子学院大学、短期大学研究紀要27号、1988年12月発行)。特にレチフの伝記の重要性に関する指摘は、「晩年の Nerval (1)《自己を描く大胆な計画》」(53~54ページ)で詳述されている。